AMDA Journal ー 国際協力 ー 6月号 □2003年6月1日発行（毎月1回1日発行） 1995年11月27日 第三種郵便物認可

月刊

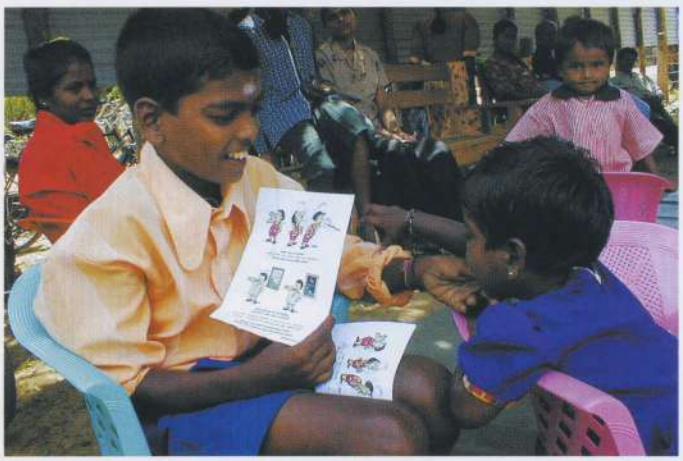
AMDA 国際協力 Journal

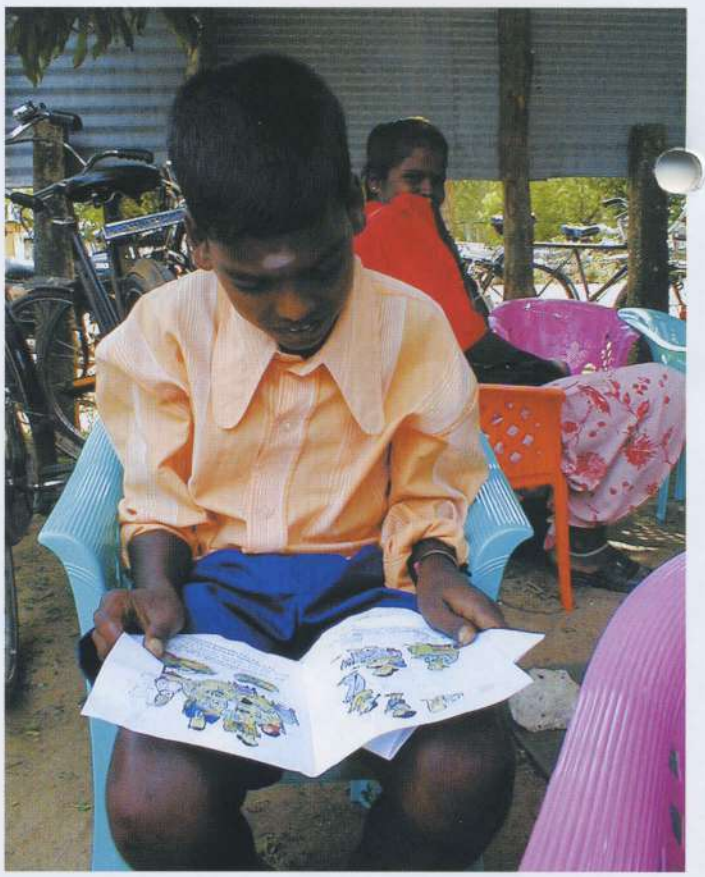
6
JUNE
2003.6.1
(VOL.26 No.6)

スリランカ医療和平プロジェクト

20年間の国内紛争の停戦合意を受け、AMDAは今年2月よりスリランカの言語、宗教の異なるタミル、シンハラ両地域の住民への巡回診療を開始しました。

↑　巡回診療風景





↑　AMDA健康新聞を発刊

2003年5月7日　キリノッチにて

AMDA
国際協力
Journal

2003
6月号

◇

CONTENTS

ペルー南部での防災対策向上のための調査

◇中南米プロジェクト特集
ホンジュラス …… 2
ボリビア …… 5
ペルー …… 8
◇スリランカ医療和平プロジェクト …… 15
◇スタディツアー …… 16
◇事務局便り …… 18
◇寄付者一覧 …… 19
◇緊急救援速報 …… 20

中南米プロジェクト特集にあたって

皆さん、中南米プロジェクトへようこそ。日本からほぼ地球の裏側にある中南米の国々でも、AMDAは活動しています。地理的に遠いということから、なかなか情報は入りにくいですが、中南米には、突き抜けるような青空と明るく元気な人たちに出会えるとても素晴らしい国々があります。AMDAは、現在、ホンジュラス、ボリビア、ペルーで保健分野を中心に様々な活動を行っています。このジャーナルを読んで、より多くの皆さんが中南米について興味を持ってくださることを祈っています。

スリランカ洪水被害に対する緊急救援速報

スリランカ政府当局者は19日、同国南部などを襲った豪雨による死者が少なくとも200人に上ると報告した。行方不明者約200人、自宅から避難している住民は約10万人に達しているという。AMDA医療和平プロジェクトチームはスリランカ政府保健省の要請に応じ、AMDAスリランカ支部とセイントジョンアンビュランスの緊急救援チームを構成した。

20日より、最も被害が大きいとされる南西部地域にて救援活動を始めた。避難民が最も必要としている飲料水、医薬品、栄養食品、ガスコンロ、医薬品200人×2週間分、仮テント等を供給。

スリランカは、過去20余年にわたるシンハラ人とタミル人との対立により、200万人を超えるといわれる人々の生活が脅かされてきたが、今回の緊急救援活動では、タミル人とシンハラ人が合同で緊急救援チームを構成し活動することで、医療和平のコンセプトに基づいた意義のある活動を目指していく。

【募金のお願い】

AMDAでは皆様のご支援をお願いしております。
郵便振替：口座番号 01250-2-40709
口座名 「AMDA」
通信欄に「スリランカ洪水」とご記入下さい。

AMDAホンジュラスプロジェクト

◇

AMDAホンジュラス　渡辺　咲子

青少年育成プログラム

首都テグシガルパ市内の低所得者居住地内にある、2つの小中一貫校6、9年生を対象に、昨年7月から5ヶ月間に渡り、ホンジュラス保健省メトロポリス保健所、青少年課製作の青少年育成プログラムを行いました。

このプログラムでは、単に性教育、リプロダクティブヘルス教育に留まらず、自己実現のために必要な、個人の可能性、男女平等、精神の発達の必要性を工作、ゲームを取り入れ展開しました。

そして、各プログラム終了時に感想や意見を記入してもらい、プログラムの評価を行いました。その中で多かった意見は、「プログラムは学校授業では受けられないもの、近い将来の自分のためになる問題が起きた時、このプログラムのことを思い出したい」といった内容が多く見られました。この感想文は、プログラムが進むにつれ、相談事や家族や恋人との問題を書く生徒もおり、毎回生徒達が書くあまり綺麗とはいえないスペイン語を読むのが楽しみでした。時にはスタッフのカルメンと、生徒の置かれている現状に涙を流しながら読むこともありました。

青少年育成プログラムの評価は、個人の成長の中で、どのような変化をもたらしたかが重要になってきますが、このような短期の事業ではその効果が見えにくいため、評価は、各プログラム終了時の感想に基づいて行いました。その結果、生徒の反応は良く、中にはこの授業があるから学校にきたという生徒もいました。生徒が個人の可能性を知り、自分の欲求に根ざした目標をもち、それを実現していくために、自分の価値観に基づいて行動できる案内の役割を果たしたと考えています。

	テーマ	目　　的
1	1. ホンジュラス青少年の状況 2. グループ形成	ホンジュラス青少年の実態を知る。 プログラム開始にあたり、この授業のルールを決め、グループを作る。
2	自己認識	自分とは。現在何ができるか考える。
3	コミュニケーション	青少年と両親との交流を考える
4	家族、母親（父親）になるとは	家庭の役割を見つめる。
5	思春期とは	思春期に起こる精神的，肉体的変化を知る。
6	性	性とは、思春期の変化を知る。
7	自己実現	将来の展望。
8	性感染症予防	性感染症とその予防。

また、青少年の積極的な社会への参加を推進するため、エイズキャンペーン、エイズ予防行進を実行。青少年育成プログラム対象校以外の学校にも呼びかけています。

様々なテーマについて考え、意見を出し合う子どもたち

エイズ予防キャンペーンは12月1日の世界エイズデイと3月のホンジュラス青少年エイズ予防週間最終日に路上キャンペーンを行い、Ramon Montoya Cerrato小中一貫校、 Principe de Asturias Philippe Borbon小中一貫校を管轄する2箇所のヘルスセンターと協力し、エイズ予防キャンペーンではヘルスセンター職員と学生達が共にパンフレットの配布を行い、エイズ予防啓発活動に参加しました。

ホンジュラス青少年エイズ予防週間は3月第3週に決められており、Ramon Montoya Cerrato小中一貫校、サンミゲールヘルスセンターとの呼びかけでエイズ予防行進を行いました。行進の先頭には、ヘルスセンター職員の自家用車に宣伝用マイク、スピーカーを搭載し、その後をエイズ予防の看板を持った生徒が行進を行いました。

Principe de Asturias Phelippe Borbon小中一貫校では、青少年エイズ予防週間を記念し、学年対抗サッカー大会を開催しました。Principe de Asturias Phelippe Borbon小中一貫校、小学部は前日から始まった教師のストライキで中止になってしまいましたが、中学部ではグループ対抗戦を行いました。サッカーはホンジュラスでは子供たちに一番人気のスポーツであり、どの学年の生徒達も大いに盛り上がりました。また、このサッカー大会に並行し、エイズ予防講習も開催。ビデオによる視覚教材を活用し、エイズ感染経路とその予防法を学び、エイズクイズで生

徒のエイズ知識の評価を行いました。

エイズ感染予防啓蒙活動の一環として、青少年エイズ予防週間には、青少年が好んで聞くラジオ局に、エイズ予防メッセージを流しました。このラジオアナウンスは青少年エイズ予防週間4日前から1週間行いました。Principe de Asturias Phelippe Borbon小中一貫校のスポーツ大会では、ラジオアナウンスを聞いたという生徒達や、もう一度AMDAの授業を受けたいと言う生徒がいました。

エイズ予防行進

コミュニティー薬局

AMDAでは首都のテグシガルパとニカラグア国境山岳農村地帯のトロヘスでコミュニティー薬局の運営を支援しています。コミュニティー薬局とは、ヘルスボランティアがコミュニティー薬局運営のための教育を受け、医薬品を低価格で販売するものです。医薬品をAMDAが一括して薬品会社から大量購入することで、単価を下げ、購入時と同価格でヘルスボランティアに販売し、低価格で医薬品を住民に提供することができるシステムを作っています。AMDAの調査では、AMDAコミュニティー薬局は市価の1/3～1/4の値段で住民に一般の薬局と同じ薬品を提供することができています。テグシガルパには低所得者居住区ラモン・アマヤ・アマドール地区とモンテ・デ・ベンディシオンの2箇所にコミュニティー薬局を設置し、昨年6月から今年3月までに、1308人の住民がこの薬局を利用しました。利用者は同地区住民に限らず、他の地域住民も利用しています。

コミュニティー薬局とヘルスボランティア

トロヘスでは、2001年11月からトロヘス市内11コミュニティーで薬局が運営されていましたが、今年2月に5コミュニティーのヘルスボランティアに薬局運営セミナーを行い、3月から運営が開始され、現在16箇所でコミュニティー薬局の運営を行っています。トロヘスのヘルスボランティアは男性が圧倒的に多く、86％が男性で、残りの14％が女性です。僻地へ行くほど、女性の地位は低く、学歴も下がっていきます。トロヘスは典型的なホンジュラスを表しているのでしょう。それでも、今回の運営セミナーには11人中4人の女性が参加しました。各コミュニティー3名のヘルスボランティアを募集し、エスパニョール・グランデというコミュニティーからは3名の若い女性ヘルスボランティアが参加しました。トロヘスのような僻地では、保健衛生の知識を持つヘルスボランティアは村人からの信頼が高く、町内会や農業組合などの委員、委員長を兼任しているボランティアが多くいるのですが、エスパニョール・グランデのように、住民が若い女性ボランティアを選出してくることは、女性の地位向上のためにも、他のコミュニティーに良い影響を及ぼしてくれることを願っています。今回のコミュニティー薬局運営セミナーも、ホンジュラス保健省薬局課から講師を招き、1週間に渡り講義が行われました。毎日午前8時から午後6時まで、薬品についての知識から、一般的な疾患の予防法、処方、助言などを学び、最終日には評価試験が行われました。ボランティアの中には、あまりの緊張で体調を崩すボランティア、神への祈りを口ずさむボランティアもいました。試験は全20問あり、看護師の私でさえも、この講習を受けていなければ、合格できるか不安になるような、高度な問題もありました。最後のボランティアが終るまで、なんと試験開始から3時間かかりました。この試験中、重度の肺炎患者が運ばれてきました。患者は2歳で、父親は3時間かけ、炎天下徒歩で患者を抱いて運んできたのですが、呼吸状態が悪く、脱水も見られ、一刻も早い処置が必要でした。しかし、トロヘスでは、肺炎を治療できる施設がなく、救急車で2時間半の病院まで行かなければなりません。父親は救急車を頼むお金がないと言い、泣き声になっていました。この話を聞いた参加者達は、救急車代を出し合い、無事にこの患者を病院まで送り届けることができました。この患者のおかげで、参加者のボラン

ティア達が、肺炎の症状を知ることができ、また予防の重要性を再認識できたことでしょう。

巡回診療

昨年10月からエル・パライソ県ダンリ市内を中心に巡回診療を開始しました。無医村を毎月一回訪問し、無料診療にあたっています。この診療は在ホンジュラス日本大使館の資金援助、ホンジュラス派遣中のキューバ人医師グループの協力を受け実施しています。ホンジュラス国内にはハリケーン・ミッチ後、カリブ沿岸地域で第一位の医療先進国として有名な医師団がキューバから派遣され、現在も国内の公立病院や僻地診療所で活動しています。巡回診療では、毎回650名から900名以上の患者を対処し、今年4月までに、5,624名の患者の対処を行いました。

薬局を担当する私たちは、毎回多数の処方箋を処理するのに、言葉を失うほど大変な作業ですが、キューバ人医師達の典型的なラテン系の陽気さで私たちの笑いを誘ってくれています。

コミュニティー薬局運営者の声

プエブロ　ヌエボ　コミュニティーは3月にコミュニティー薬局が設置されたばかりです。しかし、その運営を行っているのは2人のベテランボランティアです。今回はこの2人を紹介したいと思います。

■アルフレドはヘルスボランティア歴17年のベテランヘルスボランティアで、伝統的産婆（爺？）としても活躍し、彼の自宅にコミュニティー薬局を設置しました。

コミュニティー薬局運営開始一ヶ月が過ぎ、その感想を聞いたところ、

「プエブロ　ヌエボはトロヘスヘルスセンターが管轄する地域であるが、ヘルスセンターまで自家用車で1時間であるが、定期的な交通機関は無い。そのため病気にかかった時は馬に乗せてヘルスセンターまで運ぶか、近くの村まで馬で行き、そこで車を拾い、ヘルスセンターまで行かなくてはならなかった。ヘルスセンターに行っても必要な薬品はなく、薬局で購入していたが、このコミュニティー薬局のおかげで、コミュニティー内でさらに低価格で薬品が入手できるので、疾患の早期処置が可能になった。コミュニティー薬局のうわさはすでに周辺コミュニティー、ニカラグアまで届き、プエブロ　ヌエボ以外の住民も薬局を利用している」

■フランシスコはヘルスボランティア歴10年、アルフレドの運営を助けている。彼は「ヘルスセンターからプエブロ　ヌエボに看護師が来るのは年に一回予防接種の時だけで、往診や巡回診療など一度も無かった。AMDAのコミュニティー薬局が設置されてから、最初の薬品の供与時にコミュニティー集会をしたおかげで、薬局の宣伝ができ、自分達のヘルスボランティアとしての信頼も高まったと思う。今では住民から往診を頼まれることもある。今後もこのコミュニティー薬局が発展していくことを願っている。」

スタッフの声

■カルメン　ソーシャルワーカー

ホンジュラスは中南米に位置し、貧しい国ですが、美しい自然や海岸が、大西洋、太平洋共に見られます。

私は大学を卒業後10年間孤児院で青少年の教育に携わってきました。その後AMDAに転職し、その経験を生かし、青少年育成プログラムを担当しています。昨年の青少年育成プログラムでは、良い成果を残せたと思います。現在の学校教育では、青少年育成はカルキュラムに組み込まれていないため、このような授業は他の教師に対しても良い影響を与えたと思います。AMDAの活動で好感が持てるのは、受益者が子供から大人まで幅広くいることです。

■エメルソン　エイズ教育者/ドライバー

私はニカラグア人で、18年前サンディニスタ革命の際、ホンジュラスへ亡命してきました。

10年前からホンジュラス赤十字のボランティアとして活動し、2000年10月からエイズ教育者兼ドライバーとしてAMDAで働いています。他にも、巡回診療や救急セミナーなど担当しています。AMDAの活動は直接受益者だけでなく、その人たちが住むコニュニティーまでその影響があると考えています。AMDAの活動はホンジュラスの保健衛生に及ぼす影響は数量的には僅かなものであるが、その重要性は大きいと考えています。

ボリビア高地における救急救命プログラム

◇

AMDAボリビア　マルサ・ロメロ　（翻訳　出口　純子）

1998年2月、初めてボリビアにATLS（救急救命医師研修：Advanced Trauma Life Support）プログラムが導入された。以後26回の研修コースが実施された。コースの主な目的は医師に外傷患者の初期治療法をひろめ、救命効果を上げることである。多くの場合外傷患者の生命は外傷後の初期対応の速さによって左右されるからである。

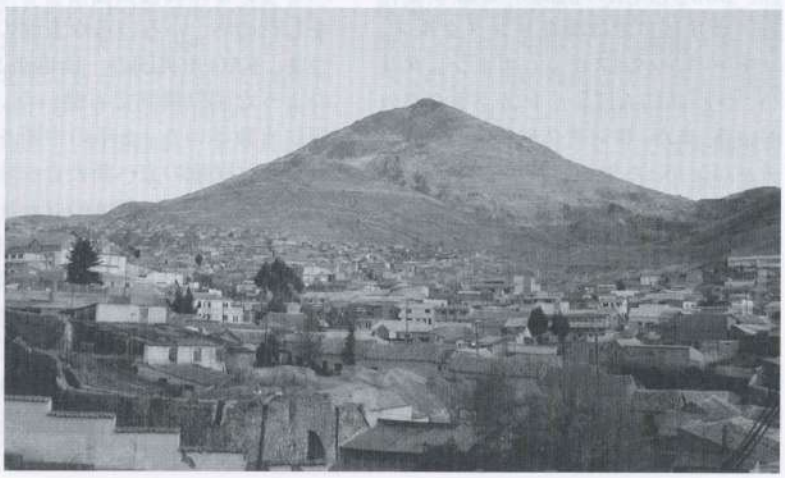
最初のコースのインストラクターはボリビア人のほか米国、メキシコ、チリからむかえた。受講した24人の医師は、理論、実技講習、グループディスカッション、模擬演習の順に外傷の初期治療を系統的に学んだ。第二回以降のコースのインストラクターは全員ボリビア人医師である。インストラクターはサンタクルス、コチャバンバ、スクレ、ポトシ、タリハ、ラパスの各都市の出身者である。

2002年3月ポトシにおいてATLSプログラムを実施した。ポトシは標高3,970メートルの高地にあり（富士山は海抜3,776メートル）、世界で一番標高の高いところで実施したプログラムと言える。ポトシはコロニアル様式の建築のよく保存された都市で、ユネスコの世界遺産に指定されている。植民地時代の邸宅やキリスト教会の建築が豊富に残され、昔の遺物も多い。アメリカ大陸でこれほどスペイン文化の遺跡がよく保存されている都市はあまりない。町を見下ろすセロ・リコ山はかつて数世紀にわたり銀鉱山として有名であった。西暦1600年、ポトシの人口は15万人で、当時のロンドンやパリ、セビリアよりも大きな都市であった。

このコースには医師16人が参加し、ほとんどの参加者が合格した。ポトシのような高地でのコースの実施経験は特別である。コースにかかわるチーム全員が標高の高さによる高山病に悩まされたが、すべての講義、実習をとどこおりなく終了することができた。

ポトシでのインストラクターは、セルジオ・アパリシオ、ルディ・ウスタレス、ホセ・ガラビト、フアン・カルロス・マイタ、ベニグノ・ロハス、マリオ・メンドサ、ホセ・ルイス・ガヤルドの各医師である。彼らの感想によると、参加受講生は意欲的でやる気のある勉強ぶりでとくに好感を持ったという。この研修はきわめて有意義であり、今後も是非ポトシで実施したい。

ポトシでは今年ATLS、PHTLS（救急救命関係者研修：Pre-Hospital Trauma Life Support）、TEAM（Trauma Evaluation and Management）コースそれぞれ一回ずつが実施予定されている。ポトシのATLSインストラクター二人がすでに資格を取得し、引続きもう二人が今年じゅうに資格を得ることになっている。



写真上：気管内挿管の研修
右上：AMDAボリビアインストラクター
右：ポトシ遠景

AMDAボリビアスタッフ

（写真中央）

ホルヘ　フォイアニーニ

＊私はホルヘ・フォイアニーニ、1940年生まれの医師、AMDAボリビアの支部長、AMDAインターナショナルの副代表の役職についている。私は外科医であるが特に消化器外科と救急医療に関心を持っている。

1994年、ゴンザロ オストリア氏、ゴンザロ アヴィレス氏、テキサス州、ダラス出身の救急医療消防士で宣教師のウェイン ブリンクレー氏とともに私は、サンタクルスのアメリカ赤十字の方式をもとにBasic Life Support（救急救命法）の指導を始めた。大学や病院などから多数の指導者を得て、1994年から2002年までにおよそ2000人を訓練し、救急救命士を養成することができた。

1994年私はおかやま国際貢献NGOサミットのため岡山に招かれた際、AMDAに出会い、その使命、理念を知り、メンバーの皆さんと面識をもった。1997年にはボリビア支部を設立し、ともに緊急救援活動を行ってきた。1998年にボリビアにATLSが導入され、すでに26回のコースが実施され、300人以上の医師が受講している。ボリビアでは現在サンタクルス、コチャバンバ、スクレ、ポトシ、タリハ、ラパスにATLSインストラクターがいる。また、サンタクルスに続いてコチャバンバ、スクレ、ポトシにトレーニングセンターをつくった。

2001年にはPHTLSプログラムを導入し、4回のコースが実施された。サンタクルスで3回、スクレで1回のコースにより100人以上の救急救命士（医師、看護士、消防士、救急車の運転手）を養成した。PHTLSのインストラクターは全国で20人になっている。

われわれは、今後もATLSとPHTLSプログラムを継続し、さらにACLS (Advanced Cardiac Life Support)、PALS (Pediatric Advanced Life Support)、AMLS (Advanced Medical Life Support) といった新しい救急救命プログラムを導入する考えである。病院搬送前および病院内での医療の向上をめざしている。

AMDAボリビアはボリビア、ニカラグア、ホンジュラス、エルサルバドル、ベネズエラの緊急救援活動に携わってきた。これからも要請に応じて支援を続ける考えである。

われわれは、高校生を対象としたAIDS予防教育プログラム、終末期患者のケアプログラムや小学校への援助などをこの国に導入する可能性を探っている。また将来は他の方面にも目を向けていく所存である。

マルサ　ロメロ

＊私の名前はマルサ・ロメロ。夫はグイード・フォイアニーニ、子どもは娘二人、息子二人の4人である。娘たちは大学を卒業し、パオラは工業エンジニア、アンドレアはグラフィック・デザイナーである。上の息子は大学一年生、末っ子は小学三年生。私は米国でバイリンガルの役員秘書としての勉強をしたのち、いろいろな方面の仕事につき、FAOや英国の British Missionのような国際機関でも働いた。旅行業界にも数年いた。2年の中断をおいてわたしは医療の方へ新たな一歩を踏み出した。それがAMDAのコーディネーターの仕事である。仕事はたいへん厳しいが、わたしはこの仕事を楽しんでやっている。医療に関してたくさんのことを学ぶことができるから。今まで私はずっと人を相手にする仕事をしてきた。そしてそれが私のもっとも得意とすることだと思う。

（写真右）

サビーネ　ヘッセルバース

＊私の名前はサビーネ・ヘッセルバース・デ・フォイアニーニ。1970年8月4日ドイツのマンハイム生まれで32歳。父の仕事（薬品会社）の関係で、私は小さいときからあちこち旅行をした。そしてホテル業に関心をもち、1997年にハワイ大学でホテルマネジメントの学位を取得した。その後米国バージニア州のウイリアムズバーグホテルで1年間、仕事する機会を得た。一時期AMDAのコーディネーターをしていた。研修コースのコーディネーターはしているが、子ども3人が小さいので今は退職している。しかしそのうちにまた復帰したい。夫も働いているフォイアニーニ（Foianini）クリニックで私がホテル業で学んだことをいかして一緒に仕事をしたいと思う。

エリザベス　ロハス

＊私はエリザベス・ロハス。26歳で既婚、子どもがひとりいる。サンタクルスの大学で経営学を学んで、現在はフォイアニーニ医師のオフィスで秘書をしている。この仕事では私は大学で学んだことを活かして働くことができる。私はまたATLSとPHTLSのふたつのコースでアシスタントコーディネーターもしている。ここでは普段の私の仕事とは別のことを学んでいる。両コースのコーディネーターになるため勉強を修了するつもりである。私は非常に意欲的な性格なので今の仕事がたいへん合っていると思う。

研修参加者

ホルヘ　サンドバル

＊私の名前はホルヘ・サンドバル。30歳で、外科研修医2年目である。2003年3月26、27、28日にサンタクルスで実施されたPHTLSプログラムに参加した。参加して非常によかったと思う。以前に学んだ理論を統合し自分の能力を高めることができた。病院に搬送前の段階で、重篤な患者をすばやく効率よく連携して扱えるようになった。このコースで学んで、一秒を争う急な場面でいままでよりも迅速に効率的処置ができるようになった。コースの参加者はみな意欲的でだれもが多くを学んだことは確かである。インストラクターは非常に有能で学識も高く、コースの企画、準備いずれも申し分なく、スケジュールは完璧にこなされた。

エンリケ　ブルーノ

＊私はエンリケ・ブルーノ。サンタクルスにあるSolidality Foundationのボランティア消防団の隊長をしている。38歳で本職は冶金のエンジニアである。ボランティア消防士として私はさまざまなところが主催する応急手当てのコースに参加してきた。その結果人体に対する傷害の影響やその手当て法について学んだ。しかし傷害もいくつもの要因が重なると対処が困難な事態になり、患者のケアもむずかしく、事故現場の混乱から救護者の対応が遅れがちである。PHTLSは私の知るかぎりもっとも科学的で周到に準備されたプログラムである。ここで勉強した救急救命士は命にかかわる傷害を的確に見きわめることができ、助かる命を落とすことなく救うことができる。また病院へ搬送中の患者への対応の方法や病院に到着後、外傷やほどこした処置などを医師に伝える方法なども教えている。

コースは医師と救急救命士の両方を対象としているので、医療関係やその他の分野の知識を増やし、重要な医学専門用語を身に付けることができる。

AMDAボリビアとAMDAインターナショナルの後援がなければ、財源や人材の限られたわれわれのグループのような団体がこのコースを開くことはできなかったであろう。AMDAボリビアとAMDAインターナショナルおよび日本に対し、われわれ全員の心からの感謝を贈る。

アレックス　ナヤル

＊私の名前はアレックス・ナヤル。37歳の医師。私は2000年に県の保健省の局長を務め、1998年、1999年、2001年には災害保健担当局の代表の任にあった。私は昨年12月のATLSと今年3月28，29，30日のPHTLSコースに参加した。その理由は、有効な外傷患者の対応策を早急に講じる必要があったからである。たとえばGuarayos（サンタクルスの東にある小さな村）で起きた自然災害の被災者は、続いて起こった火災のため人口の半分近くがひどい火傷をおった。またPailon（サンタクルスの北東にある小さな村）では洪水の鉄砲水で多くの人が負傷した。ふたつの場合とも、救援隊員も受け入れ病院側の医療スタッフも、適切な訓練が不十分だったため負傷者、患者をすばやく搬送、的確な処置ができなかったのである。

多様な主題の理論的な学習に続いて実技演習があり、病院搬送前、病院到着後の外傷処置のあらゆる場面を想定しての実地訓練を受けることができた。このコースでは手近にある設備を利用した簡単で確立された救急救命法を学ぶことができた。私は、全国の医師、救急救命士がこのATLSとPHTLSの訓練を受ければボリビア国民にとり大きな利益となると考える。

アレクサンダー
ヘッセルバース

＊私の名前はアレクサンダー・ヘッセルバース。25歳、メキシコのグアダラハラ大学で勉強した。2003年3月28、29、30日のPHTLSを受講した感想を述べたい。

私がPHTLSコースを受講したのにはふたつの理由がある。第一に自分の知識を高めることである。第二に私は、メキシコでATLSを、ドイツのハイデルベルクでNRP（新生児蘇生法）コースをそれぞれすでに取っているので、ボリビアでこのようなコースが実施されることに大きな期待を持っていたのである。

インストラクターはみなきわめて有能で、参加医師の医療知識はもとより臨床技術の向上に役立った。診断能力はここでとくに重要な要素である。クラス内容はすべて整然と組み立てられており、患者の処置を的確に学べるようになっていた。診断、実技の模擬演習のクラスでは徹底したリアリズムに感心させられた。インストラクターの細かい指導により受講者も患者役をするものも症例にふさわしい真に迫る演習になっていた。その結果傷害の事故現場はほんものそっくりであった。最後に、コース全体がよく準備され、すべてのクラスの進捗はスケジュールどおりであったことを付け加える。

結びとして、ボリビアでは外傷患者の医療についてまだ多くの不備があるので、このようなコースを実施することは極めて重要である。全国の病院、クリニックすべてでPHTLSを採用し実施することを望みたいと思う。

今回のコースのすばらしい成功はインストラクター及び関係者の尽力に負うところが大である。ここに賛辞を贈る。

AMDAペルーの活動

◇

AMDAペルー　エスカルレット・パロミノ（翻訳　藤井倭文子）

1997年、日系人学生のグループが日系学校の中等部（3・4・5年生）の生徒、生徒の親、教師を対象に若者層におけるHIV/AIDS（後天性免疫不全症候群）の予防について情報集会を開くためにAMDAの活動に参加することを決めました。その結果、AMDAの支援により約1,000人の住民が恩恵を受けました。そしてこの活動が性と生殖に関する健康問題の予防プログラムを実施するAMDAペルーのスタートとなりました。

AMDAで私達は予防に関して情報だけでは十分でないことや性的行為に伴う危険性について人々がもっと敏感になる必要があることを確信しました。この目的のためにAMDAはCNES(Centro Nikkei de Estudios Superiores:日系高等教育センター)と協力して参加型教育方法を活用して目的を達成するために現在も活動を続けています。

AMDAは社会/医療関係の専門家になるために学んでいる学生（心理学、教育、ソーシャルワークを専攻）をプログラムのファシリテーター（学校でワークショップの責任者として活動するボランティア）として集め、リマの様々な教育機関で開催するプログラムを効率よく面白い方法で指導できる責任者として訓練しました。

翌年、AMDAは若者層を対象に性と生殖に関する健康プロジェクトを企画し、それを実施するために経験豊かで献身的なグループ活動の指導者からなる一つの小グループと一緒に活動しました。このグループはＩＥＳ(教育健康機関)の協力を得て訓練されました。Villa Maria del Triunfo地域のNuevo Progreso州立学校の11～18歳の1,500人の若者層、教師、生徒の親がこのプロジェクトの恩恵を受けました。生徒を11～12歳、12～14歳、15～18歳の三つのグループに分けて性と生殖に関する健康、個人的成長及びリーダーシップの取れる人になるためのワークショップを実施し、責任ある性行為について指導するために題目は選択されました。

その結果、33～40%の生徒が次のような理解力と姿勢(態度)を改善することができました：観察力、それぞれの家族に対する態度、ペルーが抱える問題の認識、目的を達成すること。また彼等は問題解決能力も上げました。

2001年3月、AMDAペルーの1チームはテグシガルパへ行き約120人(大部分が僻地集落の医療従事者)に性と生殖に関する健康について若者層を対象に参加型教育方法を使って指導する訓練をしました。各自の経験や、問題点についての意見交換、解決策の共有、プログラムを中期から長期にわたり実施する手段等について話し合うことができました。

筆者（左）によるファシリテーター育成

これらの経験をもとにして、私達はAMDAで学んだ全ての事柄を共有するためにファシリテーターを育成することを決めました。一人でも多くの人が知識を広めるために若者層におけるSTD（性感染症）とHIV/AIDSを予防防するためのプログラムのグループ指導者を養成するプロジェクトを実施することを決めました。

このプロジェクトには3つの段階があります：

第1段階： 健康、教育、社会科学等の将来様々な職業に従事する350人の若い学生を集め、100人の参加者を選出後、彼等は6日間、続けて1日5時間、性について、彼等自身の経験を考慮に入れてのリスクと(影響)の重要性に関する認識を高めるための訓練を受けました。また、参加型教育方法の活用についても訓練を受けました。

第2段階： プログラムのファシリテーターを50人選出し、選ばれた指導者は特に子供や若者層を対象に活動するための訓練を受けました。同時に、彼等はワークショップで使うパンフレットについてデザインの仕方や作り方について習いました。15の州立学校、4つの大学予備校、6つの私立校、2つの職業訓練センター、3つの大学、2つの若者の団体がプログラム指導者によって企画されたワークショップから恩恵を受けました。ワークショップは柔軟で受講者の特性や指導者の経験によりプログラムを変更することができます。私達は25,000人の若者層にHIV/AIDSの予防について教えることができました。

第3段階： 再構成、分析、評価、変更の提案、理論、技術、アプローチの仕方等全ての経験を次の活動に役立てるために体系化しました。管理面における経験は2002年の予防と啓発運動を強化することができ、HIV/AIDS問題だけでなく、特に貧困層において増えている若者の妊娠数や性的虐待等私達のコミュニティで重大問題となっている予防分野を広めるために努力を続けました。

また、子供や若者層が恩恵を受けられるために、より良い体制、仕事の分担、コミュニティの中でAMDAの存在を徐々に位置づける必要性が3つの異なったプロジェクトを昨年訓練を受け

た3人の指導者が実施するということになりました。

プロジェクト1：

子供と若者層を対象に性と生殖に関する健康のワークショップを実施するための訓練を受けるために、参加希望者は先ず応募し、面接によって199人の参加者の中から100人の選出された学生、保健衛生、教育、社会科学の専門家が25時間にわたるワークショップに参加しました。昨年のワークショップと殆んど変わりませんでしたが、今回は特に個人的成長と性に関する保健の問題（自尊心、価値観、家族計画、性的虐待、性と生殖に関する権利、及び意思決定等）について重点が置かれました。子供や若者層を対象としたワークショップの運営の仕方と資料の作成について訓練を受け、49人がグループ指導者としていろいろなグループを指導することとなりました。同時にリマの貧困地区に所在する医療機関の99人の学生もグループ活動の指導者になるために訓練しました。

プロジェクト2：

電話の設置と法的情報及び指導。これまでに12歳から23歳の99人の若者層に避妊具の使い方、若者層の妊娠、家庭内暴力に関する問題、AMDAが実施している活動等を指導及び情報提供することができました。

プロジェク3：

32の異なった教育機関(州立及び私立)から7,523人の子供、7,506人のティーンエイジャー、300人の若者、地元教会及びその他の機関がセルフケアおよび性の認識に関するワークショップを受講しました。

このワークショップの間、私達はより近くで特定階層の人々と仕事をすることができました。

コミュニティの殆どの住民や学校当局も子供を対象としたワークショップを希望しました。その理由はこの非常に傷つきやすい年代はいつも忘れられているからです。この活動によりAMDAはコミュニティにおいてその存在を確立し、遊び心を取り入れての指導法や参加型教育方法を強化しました。

HIV/AIDS予防教育プロジェクト　ボランティアの声

（2002年度プロジェクト終了後二人のボランティアによる会話）

私の名前はアナ セシリアです。僕の名前はファン カルロスです。二人ともAMDAペルーのプロジェクト活動にファシリテーターとして参加した者です。

今回、私達はその経験をお話したいと思います。人は一つの話題、一人の人間、または団体（機関）についてそれぞれ異なった考えを持っています。その考えを変え、改善し、発展させ、実証することができます。AMDAの活動について知ったとき私たちはそう思いました。

私達はボランティア活動に参加することを決めた時、十分な時間ではありませんでしたが、度々パーティーへ行く代わりに、自分のやりたいことの代りに他の人を助けるために自分達の時間を使ったと確信しています。時間の経過と共に私達はそれ以上のことを成し遂げたことに気づきました。

全てはどのようにしてスタートしたのか？先ず私達はどのようにしてグループ活動のファシリテーターになったのか？友達、ポスター/広告、インターネット等でボランティア募集について耳にし、これが最初のステップとなりました。

その後面接の知らせがあり、ボランティアの選考と養成課程が始まりました。面接で合格した人全員が一体これから何が始まるか、研修ワークショップとは何か等好奇心にかられていました。最初の日、皆とても心配そうでしたが、親切で誠意ある環境の中で自信を取り戻しました。自分達の行動について気をつけなければいけない、何等かのテストだろうと殆んどの人は思っていました。全員心の準備が出来ていたので、万事上手く進行しました。

研修はAMDAメンバーと将来友達となる人々について知り合うために先ず円陣を作ってスターとしました。最初に卵を使って実習し、次に子供やティーンエイジャー達と一緒に勉強をしました。前向きに、そして寛容になること、また性と生殖に関する健康問題について意識を高めることについて習いました。研修のお陰で間違っていた認識を改め、最も有効な教育方法を利用することができるようになりました。

研修後、私達はこのプログラムを実施する準備が出来たと思っていました。しかし実際にプログラムの予定表で自分達の名前、日時、学校名を見た時、また少し不安になりました。子供？、それともティーンエイジャー？どちらかと言えば私は子供を相手に？それともティーンエイジャー？いろいろな考えを持っていました。

このプログラムに参加した私達の殆んどは特に子供やティーンエイジャーと一緒に仕事をした経験が無く、毎回驚きの連続でした。言葉を選んでの会話、私達の立場に気をつけること、何を話すか、どのように話し方(声)を変えるか、何をするべきか、何を避けるべきか、どんな質問が出て来るか等考えたり、要するに如何にしてよいワークショップを提供することができるか、全てに注意を要しました。

プログラムの実施中、グループでの仕事の仕方、私達自身の仕事の評価、HIV/AIDS等現在の課題についてどの様にして参加者に興味を持たせるか、性的虐待、若年での妊娠等いろいろなことを学びました。

この過程で、私達は次のような問題点に直面しました。

一クラスの学生数（40から50人）は非常に多いと思います。始めから終り迄声を失わず話すためには3倍のボランティアの数が必要だと思いました。私達は任務をやり遂げたけれども、多人数のグループと一緒に仕事をすることの難しさについて実感しました。

ボランティアの中には遅刻してきた人や大学での授業があったために、一人での活動をやむなくされた日もありました。

しかしながら私達はこれらの諸問題を解決することが出来ました。一緒に活動をしたプログラム指導者全員に感

謝しています。彼等自身の経験談、それぞれの家族、学業、個人的な成長過程において学んだスキルをプログラム指導者としての立場を越えて私達に話してくれました。

もう一つの問題点は興味をもたず、落ち着きのない学生達がいたことでした。興味を示されないことは私達が直面した一番難しい問題点でした。この問題に直面したことにより自分達も気づかなかったスキルを発見しました。私達自身が知っていたその他の問題もあったのかも知れません。

このプログラム実施中に多くの子供や若者達を指導することができたので、やり遂げたことをとても誇りに思っています。ボランティアとしての活動の最終段階では大部分の生徒は自ら個人的な問題について話にきたり、礼を言いに来た生徒もいたことに気づきました。私達が最終的に報われたと感じるのは、後日、ある子供達は性的虐待から自分を守る方法を知っていた、ある若者は正しい性の認識を持って夢を叶えることができた等と、耳にすることだと思います。その時私達は自分達の時間を有効に過ごしたと実感するでしょう。

私達はこのプログラムで性と生殖に関する健康について様々な問題に直面しているペルーの人々を助けるために活動する機会を与えて下さったAMDAに感謝しています。ありがとうございました！

AMDA ペルーの HIV/AIDS 予防教育のスタッフとボランティア

グループの活動を指導している人達の意見

Enma Quispe Saavedra

AMDA の活動に参加した動機

私がAMDAの活動に参加した理由は四つあります。

1. 私は他の人を手伝ったり、健康状態の改善や生活水準の向上のために仕事をすることが好きです。
2. この団体で仕事が出来ることに大きな喜びを感じています。AMDAは私の第二の家族で、お互いに良い関係を築いています。
3. この組織のプロジェクトや活動についてより詳しく知る機会を得たり、心理学者としての私に必要な専門的訓練を受け、さらに私個人を成長させる機会を得ました。
4. 人々との出会いを通して、意見の交換や自分自身の経験を話すことができました。

AMDA に関する意見

AMDAは結束した組織を持ち社会的にも認められた団体だと思います。そのために私達は一生懸命仕事をしています。運営及び組織レベルについては、その職務とスタッフの配置がバランス良く取れていると思います。他方では、過去に直面した問題を解決し、その結果、より充実した予防活動を実施しコミュニティ(地域)サービスを提供するための目標を達成しています。

私はAMDAの一員であることを自覚し、この団体と共に成長したいと思います。ここで学んだ全てのことに対してAMDAとそのチームにお礼を申し上げます。AMDAが性と生殖に関する健康、特にSTDやHIV/AIDS予防分野において活動を発展させていくことを節に望んでいます。

最後に、AMDAは私にとって心から尊敬する第二の家族で、私達の目的を達成するために私も最善を尽くす所存です。微力ながら、私は他の人々を助けるために常に努力を続けたいと心に誓っています。

Marilu Gutierrez Chavez

AMDA の活動に参加した動機

私がAMDAの活動に2年間参加した一つの理由は、私が学生の頃、性と生殖に関する健康について何も知らず、望まれない妊娠、性感染症、性的虐待等に直面している友達や親戚の人達がいたからです。若者やティーンエイジャーが性に関する認識を深め責任ある行動を取るために自分の時間を使っていることを幸せに思っています。しかし、グループ活動を指導している間に、私は単に他の人達を助けているだけでなく、私自身が今迄気づいていなかったスキルを発見することができました。私達は専門家として成長していますが、それ以上に一人の人間として成長しています！人間であることをより一層感じています。

AMDA に関する意見

人はある団体のメンバーになると、その一部分になったと思いますが、あなたは大切なメンバーですよ、と感じさせる団体は非常に少ないです。私はAMDA ペルーで最初はグループ活動を指導するファシリテーター、その後コーディネーターとして働きましたが、メンバー全員が一緒になって助け合いながら成長しているチームの一員になれたことを感じました。

AMDA ペルーは単に一団体ではなく、また目的を達成することだけでなく、メンバーを家族のように気遣う大家族です。これらはAMDAの一番大きな特徴で、その活動やAMDAペルーのメンバー間の関係を見てもわかるようにAMDAを充実した機関へと促しています。

オマテ市での活動経験
―AMDAペルー・防災トレーニング―

◇

ベアトリス・ウルキア（Beatriz Urquia）

オマテ市でのプロジェクトは、同市の政府機関、社会団体、一般市民という地域のすべての人々と共に活動するという意味で、私にとって、とてもエキサイティングなものであった。

私たちプロジェクトのスタッフが初めてオマテを訪れたとき、地元の人々が私たちを興味深く見ていた。アジア人がいない地域なので、日本人や日系人を含んだ私たちは、目立ったのであろう。しかし、地域の防災に関する調査を行うにつれ、地元の人々は、AMDAやプロジェクトについて知るようになり、私たちのことを彼らのコミュニティーの一部のように思うようになっていった。

住民の防災に対する意識調査（右が筆者）

政府機関や社会団体は、私たちにとても協力的で、防災についての質問に進んで答えてくれた。インタビューを実施する中で、災害マネージメントのプロジェクトをオマテ市やその他の地域で実施することの重要性を再認識することになった。また、政府機関の職員は、モケガ市など他の地域に出ていることが多く、彼らと共同で実施していくのは困難になるのではという懸念を持った。しかしながら、彼らとの最初の会合では、関係機関の代表がほぼ全員参加し、それぞれが地域社会に対しての責任と活動への参加の姿勢を明らかにしてくれた。

ボリビアの派遣医師による応急処置のトレーニング

彼らは、防災活動に興味を示し、様々な提案をし、会合は有意義なものとなった。この機会を境に、情報や活動場所の提供など、プロジェクトにとても協力してくれることになった。

調査

この活動には、多くの人員が必要となった。市民防災局のボランティア養成コースの一部を借り、参加している若者に対してプロジェクトの説明とボランティアの募集を行った。AMDAの活動に興味を持ち、すぐに多くのボランティアが参加することになった。私たちは、コグリという近くの町でもさらにボランティアを募り、より多くの人々の協力が得られることとなった。ボランティアは学生だけでなく、仕事や家庭をもつ人たちもいたが、なんとか時間を割いて、出身地域だけでなく必要とされている場所どこにでも行き、活動に参加してくれた。彼らは、私たちの活動を理解し、とても協力的である。

様々な村で共に働くことで、お互いを知ることができ、AMDAスタッフ、ボランティア、そしてコミュニティーが団結することができた。村を訪れるごとに、そこに住む人々の習慣、問題など多くのことを学ぶことができた。地域特有の果物のとり方や食べ方も学び、地元の人に勧められるまま、そのあたりになっている果物をもいでそのまま食べられるといったおまけもついていた。強い陽射しのもと長い道のりを歩くのは楽ではなかったが、人々との交流や果物を楽しみながら、活動することができた。

トレーニング

応急処置のコースをボランティアと住民に対して実施した。様々な村から40分以上かけて歩いて、コースに参加するものもいた。ボランティアは、活動に参加し始めた当初は、時間にルーズで、なかなか時間通りに集まらなかったが、今では、時間厳守でとても責任感も強くなった。

ボランティアは、今回のコースで応急処置の方法を学び、その知識を他の人々に普及できるようになった。残念ながら、会場や時間の問題で、すべての希望者がコースを受講できたわけではなかったので、また同様のコースをオマテ市の教育機関と協力して、実施することを予定している。

若者たちは、AMDAとともにオマテの人々に認知されるようになった。彼らによると、これまで若者を組織化し、彼らの持つ技術を活用する団体が存在しなかった。そのため、私たちは、コミュニティーの発展を支援するという目的のもと、若者ネットワーク「Juventud Forjadora」を形成した。このネットワークは、AMDAの支援のもと、活動計画を作成することから始めた。

最初の活動は、災害の早期警告システムを設置する資金を獲得するために、オマテのパンの販売することであった。材料の購入、パンをこねて焼く作業、販売と、いくつかのグループに分かれ、作業を分担して行った。すべての活動に参加できるよう、作業はローテーションで行った。AMDAの事務所は、この活動の拠点として利用された。この活動は、資金を得るということだけでなく、自らが地域のために共に考え、行動するという意味で、とても有意義なものになった。

私は、今回の活動経験にとても満足している。地域の若者の活動やコミュニティー全体の発展の一部になれたと感じることができるからだ。人々と親密な関係を築き、AMDAのファミリーと感じられるのは、とてもうれしいことである。ボランティアからは、「AMDAがいなければ、私たちは知り合わなかっただろう」、「AMDAのおかげで、他の機関では学べなかったことをたくさんできる」といったコメントをよく耳にする。今、私は彼らを信頼し、彼らの抱える問題を知るようになった。彼らは、災害マネージメントだけでなく、地域の様々な問題への意識が高くなった。児童や女性の虐待や望まない妊娠といった社会問題も見られた。

オマテ市は、平和な田舎の町であるが、様々な社会問題を抱えている。人々を啓発し、様々な会合を通じて、地域住民がともに学び、問題を解決し発展していくための助言を行い、支援していくことが重要だと思う。

最後になりましたが、支援を必要とする人たちのために働く機会をいただき、こころより感謝しております。

よりよい未来をめざしたAMDAとの協同活動

◇

エンリケ　ティコナ（翻訳　菊井　伸也）

NGOのAMDAがオマテ（ペルー南部の町）へ到着したことを耳にしたころから、＜AMDA＞と＜IDB＞（米州開発銀行）のロゴのついた青いベストを着た人が町を歩いているのを見かけた。何人かはアジア人で、人の話によると中国から来たのにちがいないと言うものもあれば、日本から来た人にちがいないと言うものもいた。私は考えた。あの人たちはここオマテで何をしようとしているのだろうか。どんなプロジェクトがあるのか。誰と一緒に仕事をしようとしているのか。AMDAはすでにその時点で、オマテの政府関係機関と会っていて、彼らはAMDAの活動について知らされていた。

AMDAのチームはオマテの社会、経済、文化生活のさまざまな面をすでに調査していた。チームは地元のメディア（ラジオ・カンペシーナ）のインタビューを受け、災害の予防と軽減のプロジェクトを発表した。私はおもしろいと思った。その後私は市民防災局のメンバーとして訓練を受けている間に、AMDAとの接触を続けた。

知らず知らずのうちに、私は自分から進んでさまざまな町の調査活動に参加していった。最初はトレーニングから始まり、いろいろな町で活動した。それは最高の経験であった。我々は多くの家のドアをノックしなければならなかっただけでなく、住民を知らなければならなっかったし、彼等に対する現実的な対応の仕方を知る必要があった。そしてまた、我々は野原でみつけた果物を食べることもできた。

AMDAはこのようなプロジェクトを実行に移すために懸命に努力している最初のNGOで、これこそ彼等と協力して活動した理由である。

彼等は8月までしかここにいないということを知らされたとき、我々は受けた訓練を十分活用するのが重要であると考えた。そこで我々は＜JUVENTUD FORJADORA＞という名前の、若者のネットワークをつくることにした。このネットワークの目的は次の通りである。

①人々を訓練したり、我々が得た情報を共有できるようにたくさんの町へ情報を流したりするプロジェクトを引き続いて行うこと。

②NGOと政府機関とのあいだの橋渡しとして行動すること。政府は地域社会の発展を助けるために我々の援助を必要とするであろうから。

若者ネットワークが政府より認定された。左が筆者

③ネットワークとして、我々は自立し、地元のニーズに対応する様々な活動を組織しなければならない。AMDAのおかげで、我々はおいしいオマテのパンを販売するといった、いろいろ収入となる活動を組織する元気が出た。この活動はまたお互いを知り、集団で活動する心構えを養うのに役立った。厳しい仕事ではあったが、また同時に満足できるものでもあった。なぜなら何時間もの労働にもかかわらず（グループの中には夜遅くまで働かねばならないものもあった）みんなから受けた暖かい援助はまさにその報酬であったからだ。JUVENTUD FORJADORAのネットワークとAMDAは、いわば同じ船に乗り困難をともにしているわけだ。たぶん我々は孤島にいるのかもしれないが、海に漕ぎ出すとなれば、お互い分かち合った経験をオールとして使うこともできる。

我々は目標を定め、全員はそれに向けて心を一つにしている。我々はどんな障害をも克服できると信じている。そしてもしだれかの心に疑いが生じたら、他の人たちがその活動を継続できるように手をかす。

ここには災害救援で活動するいくつかのグループがやって来た。彼等は到着すると、訓練を実施し、装備を与え、それから去っていった。我々を訓練し、組織をつくってくれたのは今度が初めてだった。災害予防の話題は若者にとって退屈なものなのだが、AMDAの提案はそうではない。

JUVENTUD FORJADORAの若手メンバーは、早期警戒ネットワークを構築したり、定期的に防災演習を行ったりするために、収入を生み出す活動を組織している。このような方法で災害軽減の面だけでなく、小規模でも事業の収入を上げることで、オマテの若者の働く機会を与える面でも、我々の努力は実を結ぶであろう。

AMDAとオマテ青年達の協同体験活動

◇

JUVENTUD FORJADOR （若者ボランティアネットワーク）

我々ほとんどの者が市民防災局の一員として訓練をうけていたとき、AMDAのことを聞いた。彼等のプロジェクトすなわち災害予防や軽減策についての話であった。それは興味深い話題であった。自分たちの地域社会についてより多くのことを学ぶ機会であった。そして本来の活動時間をやりくりして、ボランティアとしてこのプロジェクトの活動に参加するため、空いている時間をうまくそれに合わせた。

調　査

我々はそれぞれ異なった町を訪問し調査をおこなうべく、小さな班に分けられた。我々は自分たちの地域をより多く知る機会に恵まれた。こうして、打ち合わせが終わったあと活動を開始したが、たちまち最初の困難に直面した。

対象の家族にどのように自己紹介するか。

調査に協力してもらうために、どのように頼むか。

調査をいっそう楽しくするのにはどうするか。そう、我々はあれこれと学び続けていたのだった。少したつとこの仕事はとてもおもしろいものになった。

AMDAの方々は常にどんな問題にも援助の手をさしのべるべく気を配ってくれていた。

訓練のコース

1　応急手当

これは非常に重要なコースであった。我々は市民防災局の訓練中に、応急手当についてはいくらかを学んでいたのだが、AMDAの専門医、Dr.Rudyが我々の疑問を解いてくれ、応急手当についてさらに深く教えてくれた。その上、それは我々だけのために設けられた訓練であった。応急手当の理論を実践するため練習用の人形（ダミー）をつかうこともできた。

2　参加型研修方法ワークショップ

我々はいつでも人々に訓練を実施する準備ができていると考えていた。し

調査に参加した若者ボランティアとAMDAスタッフ

かし訓練したり教えたりするもっと活動的でおもしろい方法があることを知らなかった。このような理由で我々は皆どのように人を訓練するかについてのワークショップに参加したのだった。最初はほとんどの者がもの珍しさから、このコースに登録した。しかしいざ始まってみると参加者の意識は変わった。我々は訓練を受けたり、グループで活動をすることは、とても重要なことであると認識した。それは容易なものではなかった。他人を訓練するのには、より周到に準備されていなければならなかった。そのワークショップはとても活発なもので、すぐお互いを知るようになった。我々は劇を演じたり、さまざまなゲームを通して学んだ。グループで活動することで、いっそう学びやすくなった。なぜならお互いに意見をよく聞いたからである。また他人の考えを尊重し、注意して聴き、よく考えてみることの重要性を悟った。我々は幸運であった。大きな講堂が使われたが、その日はたくさんの参加者でうめられ、参加できない人もいた。(次回にはその人達も遅れないで参加してくれるにちがいない)

ネットワーク作り

AMDAとの協同作業によって我々はお互いを知り、考えを交換する機会をえた。ある日、我々の活動から手に入れることができる資金で社会福祉の事業を組織し、また同時にメンバーを訓練したり、長い目で見て彼等に仕事を提供できるようなグループ組織をつくることができるかどうか話しあった。我々はオマテのAMDA代表にこれを伝えた。彼はプロジェクト責任者に話した。すぐに返事が来た。「AMDAはこのプロジェクトを支援します。」

我々は先ずオマテの特別製のパンを作り始めた。仕事の分担ごとにメンバーが分けられ、準備がととのった。最初にパンの材料を買った。それからあるボランティアの父親に手伝ってもらってパンをつくりはじめた。初日のパン焼き係は朝4時30分から昼の2時30分まで働いた。最初のパンは朝9時に出来上がり、販売係はバス停まで売りにいった。残りのパンは教会で夜のミサのとき売れた。我々はEl Moroという有名な古い木のそばで、寒さを身に感じながら、皆一カ所に固まって、互いに声を出して元気づけ合ったり、次の当番の配分を考えたりしていた。つぎの回では、知れ渡ったパンだけでなく、伝統的なホット・チョコレート(飲料)やスポンジ・ケーキも作った。このネットワークの一員になりたいと話していたヤネットさんは、パンやスポンジ・ケーキを作るのを手伝ってくれた。彼女はオマテのパン作りの名人である。その晩は期待していたとおり販売は成功であった。すべてのパン、スポンジ・ケーキそしてホット・チョコレートを売り切った。しかし我々にとって最も重要なことは、ネットワークの人々のチームワークであった。El Moroの木のそばで一生懸命力を合わせて活動したことだった。

いま我々は、町で実行できる次の活動を組み立て中である。

オマテの青年達を信頼し、自然災害を防ぐ活動に参加するだけでなく、オマテの発展に寄与する機会を与えてくださったことに対してAMDAに感謝しています。

AMDA中南米プロジェクトへのご支援をお願いします

郵便振替
口座番号　01250-2-40709
口座名　AMDA
※通信欄に「ホンジュラス」「ボリビア」「ペルー」あるいは「中南米」とご記入下さい。

◆お問い合せ先：
AMDA海外事業本部　田中
TEL 086-284-7730
FAX 086-284-8959

ネットワークの活動資金作りのためパンをつくるボランティア

北部内戦被災地巡回診療開始

—明石政府代表御一行視察報告—

◇

調整員　濱田　祐子

5月7日午後、明石政府代表が、在スリランカ日本大使館大塚大使、外務省山田南西アジア課長一行と共に、AMDAスリランカ医療和平プロジェクト:北部キリノッチでの巡回診療（この時点ではヘルスキャンプ）を視察された。サイレンを鳴らしながら警護にあたる十数台のバイクに囲まれた一行の車列は、当日の朝からキリノッチ各所を駆け巡り、町のいたるところでAKASHIのことで話題になっていた。

いよいよAMDAの番である。日本の国旗、AMDAのロゴが入った看板を2本立てたA9沿いで富田、山根調整員が巡回診療場所へと一行を先導した。明石代表が車から現れるとすぐに、LTTE経済担当Dr.Jayが現地のLTTE政府幹部、LTTEヘルスデパートメントの医師、AMDAスタッフを紹介、続いて濱田と丸山調整員が巡回診療場所へと案内、説明を行った。そこでは、AMDA巡回診療ﾄﾞｸﾀｰであるシアミラ医師（タミル系イギリス人）による超音波診断装置を使った産婦人科検診、ワウニアから助っ人できていただいた井上看護師による心電図検診、AMDA、政府看護師による妊婦の健康診断、LTTEドクターによる一般検診の様子を視察された。明石代表と大塚大使は皆に暖かい励ましの声をかけられた。超音波診断装置での妊婦検診をご覧になり、「スリランカ中で最新で、キリノッチでは唯一の診断装置ですよ。」とDr.Jayは説明を添えた。巡回診療診察現場を視察された後、巡回診療車にはられたプロジェクトの情報をご覧になる。南部、北部での活動場所、活動写真、参加者名、新聞広告や日本の新聞記事、写真、今までの主要イベント等の詳細を濱田より説明した。視察自体は約20分ほどで終わったが、その後AMDAスタッフ、保健省、LTTEヘルスデパートメントとお茶を飲みながらお話される時間を作っていただいた。

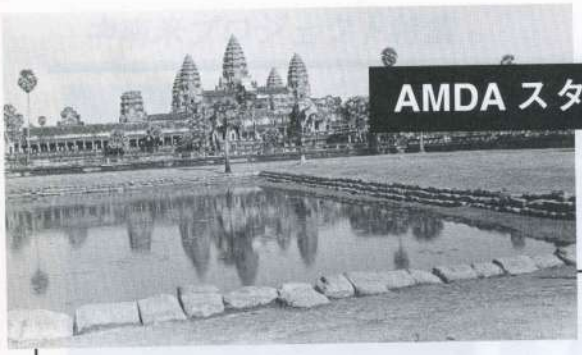
そこでも明石代表、大塚大使をはじめ視察団の方々よりAMDAの活動を称えるお言葉をいただいた。ありがたいことである。最後に明石代表よりAMDAスタッフに対し、「日本の若い人にがんばってもらうことは非常に頼もしい。体に気をつけてがんばってください。」と改めてお言葉をいただいた。この様子はFELANATHAMという現地メディアとNHKテレビによって取材された。翌朝の地元新聞では明石代表のAMDA視察のことが大きく取り上げられ、スタッフ一同、朝食をとりながら喜びを分かち合った。

これは、キリノッチでの視察予定が決定されたときから10日間、コロンボ本部、キリノッチのコミュニティ一致団結でヘルスキャンプ巡回診療開始の準備を行ってきたことを反映している。片道8時間以上かかるキリノッチにコロンボから数回足を運び、巡回診療場所の選択、現地の諸機関との打ち合わせを積み重ねた。電気、水がない巡回診療場所で超音波診断装置や、心電図検査を行うための工夫がなされた。発電機、変圧器をはじめとする周辺機器を整え、コロンボの関連会社からはシンハラ人技師に現場に来てもらったこともあった。このことは、普通シンハラ人は行き来しないLTTE支配地キリノッチでは異例のことである。その技師には、超音波診断装置の使い方、維持の仕方を現地のタミル系スタッフへのトレーニングもしてもらった。

北部タミル地域での巡回診療では海外に住むタミル人のネットワークも関わっている。その大半が戦争から逃れた移民である。巡回診療を担当するシアミラ医師も、2歳のとき、スリランカ北部のジャフナからイギリスに移られたそうだ。今年2月はじめてスリランカに戻ったときに、戦争の跡が生々しく残っている生家を訪れ祖国の民のために尽くしたいという一心でAMDAの医療和平プロジェクトに応募してきた。参加していただきたいという連絡を差し上げた1週間後に6ヶ月の休暇を取りスリランカに到着している。巡回診療活動だけではなく医療スタッフを育成する必要性も感じておられ、トレーニングも行う予定である。

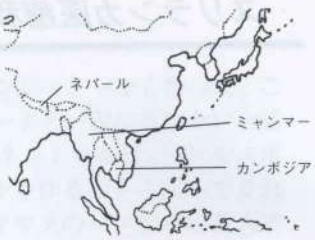
タミル系オーストラリア市民のニティさんもLTTE経済担当Dr.Jayの右腕の若い青年である。紛争を逃れ、13年前、オーストラリアの大学に留学した。大手石油会社SHELLで働いていた経験がある。もともと保健分野に興味があり、直接貧しい人々のために医療を届ける仕事につきたいということで働いていただくことになった。人間関係、諸機関との調整が特に難しいタミル地域でのニティさんの存在は重要である。

今回のキリノッチヘルスキャンプ実施とその視察が、当地巡回診療立ち上げの大きな契機になったということと、ワウニア、ハンバントタを含める全てのスタッフの日頃の努力を少しでも明石代表、大塚大使をはじめとする一行にお伝えすることが出来たと我々現地スタッフは確信している。同時に医療和平プロジェクトのスタッフと現地の住人との間で、巡回診療を通して医療向上への協力体制を整えることが出来たと感じた。シンハラ人、タミル人、日本人派遣者も視察が成功するように皆で力を合わせて準備した。このような協力体制が和平に向けての小さくとも確実なステップになることを祈る。



AMDA スタディツアー in カンボジア

3月1日から9日まで実施されたカンボジアでのスタディツアー参加者からの感想をご紹介します。



「出発からプノンペンまで」

3月1日
東京都　久米　大輔（会社員）

出発当日、これから始まるスタディツアーへの期待と未知の経験に対する不安を持ちながら成田空港へと向かいました。

このツアーには医師、看護師、学校の先生、大学生など職業や年齢が様々な人が参加していました。そして今振り返ると本当に個性的な方が多く、楽しい思い出をたくさんつくることが出来ました。

カンボジアの首都であるプノンペンの空港に降り立ち、目にしたものは近代的なきれいな空港でした。数年前までこの空港は木造平屋建であったようなのですが、カンボジアも急速に発展しているのかなと思いました。そしてバスでプノンペンの中心にあるホテルに向かいました。着いたのが夜ではありましたが、街頭や家の明かり等がほとんど見えませんでした。しかし、目を凝らして見てみると、その暗闇の中に人がいて、屋台でご飯を食べている人や道端を歩いている人がいることに気づきました。この国ではまだまだインフラが整備されていないなーなどと考えながらホテルに到着しました。

「コンポンスプープロジェクト」

3月4日
岡山県　川上　侑希（学生）

アンコールワットの観光を終えた私達はツアー4日目、コンポンスプー州を訪れた。

障害者や、貧困層の方々を対象に村々を定期的に無料で巡回診療しているモバイルクリニックに同行させてもらった。カンボジアの人々は近所の繋がりが強く、障害者に対しても全く差別がないということを聞き、日本人も見習うべきところではないかと感じた。

午後から、個人的にはこのツアーのメインだった、チャンバック小学校を訪れた。このチャンバック小学校はAMDA高校生会と企業とが協力して再建した小学校で、実は、私もAMDA高校生会の一員としてこの活動に参加していた。二年前の開校式にも出席していたので、これで二回目の訪問となるのだが、私にとってチャンバック小学校はいろんな思いが詰まっており、本当に楽しみにしていた。子ども達と折り紙で一緒に遊んだり、手作りの風車をプレゼントした。子ども達はとても楽しそうに私たちと遊んでくれ、私たちもとてもうれしかったし、楽しかった。二年前とはまた少し変わった小学校の姿を見ることができて、とても良かった。機会があればまた是非行きたい。

高知県　寺尾　茂子（看護師）

コンポンスプー州の村落開発では、それぞれの村に村長がおられ纏め役として活躍し、各家ごとには鳥・ブタ・牛など飼っていたり、自給自足の生活をされていました。特に女性は自立心が強く、村の中から4名のリーダーを作り自立支援としてバナナの皮で作ったカゴ、バックで収入を得たり、各家庭を訪問し掃除しあったりと、村は活溌化している様でした。

「プノンペン市内での他のNGO活動見学」

3月5日
東京都　館野　和之（大学講師）

キンクラン・リハビリセンターに向かう。センターは、アメリカ退役軍人協会などから拠出される豊富な資金を背景に、訪れた障害者に対して差別なく義手・義足や車いすを無料で提供している。義手・義足を製造するレベルは、ほぼ現代の日本と比べても遜色ない。義手・義足や車いすを装着した上で通常生活を送れるようトレーニングをするリハビリセンターも併設されている。訪れたときはちょうど休みの時間であり、車椅子に乗った人たちがバスケットボールに興じている姿が印象的だった。

プノンペン南部のスモーキー・マウンテン（ゴミの山）に向かう。到着した時の感想は、まさに「地の果てに来た」というものだった。ものが焼ける匂いとすえた匂いがないまぜになって鼻をつき、彼方までゴミの山が広がっている。ゴミから出るフロンガスは自然発火してダイオキシンを発生させ、地下に浸潤するので土壌や井戸水への深刻な環境汚染が懸念される。

続いてCMAC地雷除去センターに向かう。地雷除去はスタディーツアーに参加した動機でもあり、大きな期待があったが、結論からいってもの足らなさを感じた。もっと地雷除去の現場の声を聞き、現場の実情を見たいと強く感じた次第である。

「タケオ州アンロカ保健行政区事業1日目」

3月6日
広島県　村本　浩子（学生）

首都プノンペンを出発し車で南

へ約1時間15分走った所に位置するタケオ州のアンロカに行きました。最初にAMDA Ang-Roka District Health Projectについて事業目標・管轄保健医療施設・プロジェクトスタッフ・具体的活動内容等の説明を受け、次に結核・マラリア・コレラについての講義もありました。プロジェクトの中で重要であると感じたことの一つはヘルスプロモーションを行っていく上で"予防"に力を入れることが重要であるということです。病気を治療することも必要なことですが、病気にかからないように生活することはさらに大切なことであると改めて実感することができました。

昼食を挟み、午後からは2つのグループ（ヘルスプロモーション／病院・診療所）に分かれて見学をしました。私は病院・診療所の見学に参加しました。病院では29名のスタッフ（医師・看護師）が働いており、入院している患者さんは成人では結核の患者さんが多く、子どもでは呼吸器疾患・下痢疾患の患者さんがいました。その後2つの診療所を見学しました。診療所を利用するほとんどの村人は多くの時間をかけて診療所に来なければなりません。診療所に来る患者さんの中にはマラリアで来る人も多いということでした。診療所には診察室と分娩室、医師の部屋がありました。

その後現地スタッフとバレーボールをしたり、クメール語の講座もありました。バレーボールは現地スタッフの完封勝利でしたがとても楽しかったです。クメール語講座の時にはツアー参加者の中から石川さんが日本語の先生になってくれて現地の人に日本語の講座をし、お互いの国の言葉を楽しく勉強することができました！夜は現地スタッフの家にホームステイをし、現地の人の生活を垣間見ることができ、また肌で感じることができました。

「アンロカ保健行政区事業2日目 プノンペン市内観光」

3月7日

千葉県　石崎　英美（学生）

午前中は2つのグループに分かれ、1つは、アンロカ・リファレルホスピタルの見学、もう1つはHealth Educationで劇をしました。私は前者のグループに参加し、カンボジアの医療制度や薬に関しての問題などの話も聞くことができました。カンボジアでは、期限切れの薬や日本では禁止された薬などを、Medical知識のない人々が無許可で売っている所もあるそうです。実際、市内を移動している間、ここ彼処に薬局があって驚きました。一般の人々が薬に関するちゃんとした知識を持てるような機会を政府やNGOなどが作るべきではないかと思いました。

午後は、プノンペンに戻って、ツールスレイ博物館へ。どういうところかは事前に聞いていたので、行く前から気分が重くなりました。ここは、もともと小学校だったそうですが、ポルポト時代に収容所として使われていました。いくつかの棟に分かれていて、始めに人々が虐待を受けた部屋（発見された当時のままの写真と実際に使われていた道具類が置いてあります。）、次に独房を見学しました。何人かのツアー参加者はその独房に入り、空気がとても重いとも言っていました。最後の棟は虐殺された人々の顔写真と遺骨、そして悲惨さを描いた絵画が展示してあり、すべてを見学し終わったときには、無力感に襲われ、それまで我慢していた涙が止まりませんでした。戦争を経験したこともなく、平和ボケをしてしまった私は、生きてきた中で1番の衝撃を受けました。

「最終日—この旅について」

東京都　大嶋　亮平（学生）

今回のツアーで痛烈に思ったことが一つある。それは「行動を伴わない理論は、実際何の役にも立たない」ということだ。スタッフの岡本さんはバス車内での別れの挨拶で「今回のツアーで、みなさんは自分の目標に向かって一歩前に踏み出したのだと思います」とおっしゃっていた。私自身も今回のツアーが自分にとっての「行動」の第一歩だと信じ、参加者との出会いを大切に、これからも自分の目標に向かって頑張っていきたい。このような機会を与えてくださったAMDA関係者の皆様方に深く感謝申しあげます。特に今回のツアーで私達をつきっきりでお供して下さった伴場さん、本当にお疲れ様でした。

AMDA職員　伴場　賢一

無事スタディーツアーを終了する事が出来ました。

今回のツアーを企画する上で、目的としていたのが私達の活動を見学してもらうのはもちろんの事、「現地の人達と交流できるツアーにすること」「何か一つでも問題意識を持ってもらう事」の2つでした。何処まで目的を達成できたかは解りませんが、日本では想像も出来ない電気も水道もない環境下でホームステイを行い、カンボジア人とクメールダンスを踊ったり、異文化の真っ只中で繰り広げられた9日間のツアー。全ての行程において積極的に参加してくださった、個性的で魅力的な参加者の皆さんに心から感謝します。

AMDAでは、今夏、カンボジア・ネパール・ザンビア・ペルーにてスタディーツアーを企画しています。次回は皆さんのご参加を心からお待ちしています。（次頁参照）

事務局便り

AMDA活動写真展で講演会

—「国際理解」教育への協力—

AMDA活動写真展が開催された岡山県成羽町の成羽町美術館にて、会期中に近隣の小学生を対象に講演会を行ないました。講演会は美術館の要請によるもので、展示された写真約120枚を見て回ることから始まりました。展示室の床に座り、写真に囲まれてAMDAの職員からAMDAの話を聞く子どもたちはとても熱心で、たくさんの質問や感想がとびだしました。活動写真展での講演会は、AMDAの国際協力活動をより身近に感じていただける良い機会となりました。こうした企画をたててくださった成羽町美術館の皆様に御礼申し上げます。

AMDAは要請がありましたら活動写真の貸出しを行なっております。また、講演会にも出向いておりますので、AMDA事務局までご一報下さい。

連絡先：AMDA広報室　上原康代
電話 086-284-7730　FAX086-284-8959
E-メール member@amda.or.jp

成羽町美術館でのAMDA活動写真展

小学生にAMDAの活動を紹介するAMDA職員

みなさんはじめまして。4月から広報を担当させていただいております上原と申します。今後、AMDAの活動を皆様により広く知っていただく広報活動の一環として、講演会、報告会等ご要望があれば積極的に職員を派遣していきたいと考えておりますので、ぜひご一報いただきたいと思います。その他、皆様との絆が深まるような企画がございましたら、どんどん取り入れていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

2003夏季AMDAスタディツアーご案内

1. AMDAカンボジアスタディツアー

—アンコール・ワットと希望にあふれた国づくり—

日程：2003年9月13日（土）～9月21日（日）
8泊9日
費用：¥193,000（関西空港発着）
¥213,000（成田空港発着）
参加申込み締切：8月1日（金）必着
最小催行人数：5名。タイ航空（国際線、バンコク経由）シェリムアップ航空（国内線）利用予定。

2. AMDAザンビアスタディツアー

—アフリカの大自然体感と参加型スタディツアー

日程：2003年9月6日（土）～9月15日（月）
9泊10日
費用：¥328,900（関西空港発着）
参加申込み締切：8月1日（金）必着
最小催行人数：3名。シンガポール航空（シンガポール経由）南アフリカ航空（ヨハネスブルク経由）利用予定。

3. AMDAネパールスタディツアー

—ネパール伝統文化にふれ、海外援助支援について学ぶ旅—

日程：2003年8月31日（日）～9月8日（月）
8泊9日
費用：¥260,000（関西空港発着）
参加申込み締切：8月1日（金）必着
タイ航空利用予定（バンコク経由）
募集人員：先着15名（最小催行人数：5名）

4. AMDAペルースタディツアー

—古代インカ文明とペルーの若者たち—

日程：2003年8月20日（水）～8月28日（木）
8泊9日
費用：¥348,000（伊丹空港発着）
¥338,000（成田空港発着）
参加申込み締切：7月18日（金）必着

●上記のスケジュールは、現地の事情等により予告なく変更の可能性があります。
●さらに詳しい旅程表をご希望の方は、AMDAホームページ（http://www.amda.or.jp/）をご覧いただくか、あるいは電話にてお知らせ下さい。
＊お申込み·お問い合せ：AMDA〒701-1202岡山市楢津310-1電話086-284-7730 FAX 086-284-8959 E-mail:member@amda.or.jp

ケニア洪水被害に対する緊急救援活動速報

4月中旬よりアフリカ東部の広い地域で豪雨が降り続き、ケニアでも洪水が発生し、10万人程度が避難を余儀なくされているという報告がはいった。

5月8日、ケニア政府は国家規模の災害として非常事態宣言を発令、国際社会に支援を要請した。

このため、AMDA本部とAMDAケニアプロジェクト事務所および国際医療協力機構(IMCU：本部大阪府八尾市)は協議の上、日本人スタッフ1名と現地スタッフから成る一次チームを派遣することを決定した。

一次チームは今月11日、ケニアの首都ナイロビから被災地に向けて出発、被害状況の深刻な西部州での調査と緊急医療救援を開始。

ケニア洪水状況

ケニアでは4月20日頃から始まった大雨によって、5月11日現在60,000人が避難、40人が死亡、現地報道によるとすでに家屋・道路・作物等に大きな被害が出ている。

4月20日から5月6日までの17日間に、ケニア各地で200～500mmの降水が観測されており、4月の月降水量の2～9倍となった。この雨は、ここ数年で最も深刻なものである。しかし、現時点ではまだ雨期の初めに過ぎず、被害状況が拡大する可能性が高いため、より備えが必要とされている。

最も被害が深刻なのは西部州で、西部州の中心地ブシア(Busia)では昨年完成したばかりの堤防が崩壊。15,000人の住民が援助機関によって設置された高台のシェルターに避難したり、野宿の状態となっている。また、5月4日には北東部州にあるケニア第二の規模のダムが決壊しており、2週間もすれば大被害となるおそれがある。国連諸機関の報告によると、北東部州のダダブ難民キャンプも125,000人が深刻な状況にあり、土壁でつくった3,000人分の難民シェルターが流されている。道路に水があふれ、交通渋滞を引き起こしている。被災地では住民がマラリアの危険にさらされ、トイレの崩壊などにより下痢などの水感染症が危惧されている。首都ナイロビでも水処理施設が影響を受け、300万人の人口の3分の1が影響を受けているといわれる。

このような被害状況が報告される中、ケニア政府及び各援助機関は被害調査及び支援活動を開始した。

AMDAの支援活動

この被害状況に対し、AMDAではAMDAケニア事務所が中心となって、IMCUの協力を得て合同医療チームを派遣した。

11日ナイロビを出発した第一次AMDA/IMCU合同医療チームは、同日午後2時（日本時間同日午後8時）に無事西部州ブシアに到着。ケニア政府保健省（MoH）の要請に基づき、ブシア州ブダランギ（Budalang'iはBusiaより南南西へ10Kmに位置する）の南部にあるルガレ（Lugare）避難民キャンプで医療活動を開始。同キャンプでは洪水により家屋を失った618世帯、約3,000人が避難生活を送っている。

洪水発生当初はブダランギの中でも他の地域に支援物資が集中し、ルガレキャンプへの援助は遅れていたが、12日ようやくAMDAの医療チームなどの援助が届いた。

第一次AMDA／IMCU合同医療支援チーム
（5月11日より活動開始）

横森健治　主任調整員
（日本·AMDAケニア事務所）
宮田久也　調整補佐　会計（日本·IMCU）
クリス・ウエソンガ
調整補佐/ロジスティックス(ケニア)
ワンザラ　医　師（ケニア）
アグネス・オバンガ　看護師（ケニア）
ケネス・オティエノ　検査技師（ケニア）

AMDAでは、さらに支援チームの派遣を継続し、5月19日より柳田展秀（AMDA本部職員）を派遣した。今後も医療救援活動をすすめていく。

【募金のお願い】
AMDAでは皆様のご支援をお願いしております。
郵便振替：口座番号 01250-2-40709
口座名 「AMDA」
※通信欄に「ケニア洪水」とご記入下さい。

【お問合せ】
特定非営利活動法人AMDA
広報室　上原
〒701-1202　岡山市楢津310-1
TEL: 086-284-7730　FAX: 086-284-8959
URL　http://www.amda.or.jp

イラク緊急救援活動 (2003.3～5)

イラクのアル・ファウ市街地。時折銃声が聞こえ、破壊の爪跡は至るところで見うけられた。AMDA緊急医療チームは、緊急時に備えて、イラクとの国境地帯において24時間態勢で救急車輛をスタンバイしていた。（写真①）

イランのフーゼスタン州に開設した連絡所兼倉庫前。救援物資を搭載してイラクへ出発。（写真②）

①

被災した家族。家屋が崩壊され、郊外の空き地でプラスティックシートや布で建てたテントで暮している。衛生環境は劣悪で、日中の気温が40度を超えるなか、コレラなどの感染症の流行が懸念される。AMDAは地元医師に予防・治療薬を配布した。（写真③④）

支援物資の一部はテント暮しの被災者家族に直接配布した。医療知識がなくても扱える、ＯＲＳ（経口補水塩）、粉ミルク（栄養強化したもの）と授乳器など。（写真⑤）

②

⑤

③

④

5月以降、クウェート方面より米英軍の保護のもと、医療および物資等の救援が同地域に到着し、AMDAは緊急救援活動を終了しました。ご支援いただき有難うございました。
今後も治安情勢を見つつイラクの復興支援活動の準備を進めてまいります。

夕暮れ時のテグシガルパ

みなさんのちからを
必要とされる人たちがいます

AMDA募金箱を置いていただける方はご連絡下さい（TEL 086-284-7730）

AMDA Journal — 国際協力 — 2003年6月号

2003年6月1日発行（毎月1日発行）VOL.26 No.6 1995年11月27日 第三種郵便物認可 定価600円
発行／AMDA 〒701-1202 岡山市楢津310-1 TEL 086-284-7730 FAX 086-284-8959

AMDA ホームページ
http://www.amda.or.jp